

『土台』

理事 青木 高志

『青ちゃん、それってズルくないですか?』と一人の修園生が述べると、周りの修園生たちも一様に首を縦に振りながら頷いた。

先日、新潟県十日町市浦田（旧松之山町浦田）にて、私が三十三年前より十年間、指導者として勤務した松之山学園の同窓会が開かれた。現在、学園は閉園となってしまったが、旧センターにて一泊し、地元の同級生たちも大勢集まって、懐かしいひと時を過ごした。修園生それぞれ四十の齢前後、伴侶や二世を連れての参加も多く、それぞれ人生の時の経過を感じさせるものだった。夕食のバーベキューや興にのって太鼓や踊りをしたりと、お腹を抱えるほど笑い、楽しい時間が過ぎた。そして夜半になって、センターの食堂に修園生が集まり、一献を傾けな

がら語り合った。

そして、子育て中の一人の修園生が、学園生時代を振り返りながら問いかけてきた。「赤ちゃんはあの時、どんな思いを持って私たちに接していたのですか」と。

その質問に対して、三十年前を振り返ってみた。右も左もわからない二十代の青年が、何の実践経験も持たず、二十人近くの子どもたちの中に飛び込んだのだ。あるのは育てる会の教育理念を表したチャート図と、創設者が綴った書物のみ。

会の目指す子どもの理想像『それぞれの目的をもって嬉々として生きている子ども』を構築する、子どもの中に形成を期待される『六つの力』（詩情力、工夫力、個性力、共存力、行動力、心の安定力）。そしてその力を培う体験は何なのか？ 日々子どもたちの命と生活しながら、いかに多様な体験環境を整えてあげられるのか？

そればかりを模索する毎日だったと思う。そして何より自分を苦しめたのは、指導者像として『子どもの中に、自主的・主体的行動の芽生えが醸成されるのを待ち、多彩な体験活動により、それが一人歩きするのを助成する』という『待ちの姿勢』で子どもたちを見守ることだった。日々の生活や体験活動において、個や集団に対して、敢えて失敗体験をさせること、課

題・目的に対して主体的に取り組む中で、いかに体験の幅を広げられるかなど、常に子どもを中心に据えて『待ちの姿勢』で子どもたちに接し、自分の課題としていたように思う。

その頃の自分は若さ故か、後ろも左右も見ずに、実践の振り返りさえもともにせずに、ただ前だけを見つめて衝動的に動いていたように思う。今思えば、当時の保護者の皆さんは、がむしやらな若い指導者に子どもを預け、さぞかし心許ない思いをされたのではないかと思うのだ。もしやすると、私自身に対して一番『待ちの姿勢』でいて頂けたのが保護者の皆さんだったのかもしれない。

そんな若年時代を過ごした松之山の十年間。私と共に過ごした子どもたちは、どんな姿で生活していたのか……。世界有数の豪雪地と知られる厳しい自然の中での暮らし、溢れるばかりに子どもたちに注がれる生活の知恵、四季折々の自然体験や農作業、太鼓や踊りの表現活動など、体力的にも精神的にも、滾るような毎日を送る一年間だったように思うのだ。そしてその滾るような体験は、一生の宝でもあり、山村留学後の本人を悩ませるものでもあるようだ。

私は『生きる力』とは『与えられた環境の中で、いかに自分らしく課題をもち、楽しく生活する力』だと思っている。学園を巣立って行った子どもたちは、一般的な学校に進む子、オルタナティブな学校に進む子、海外に出る子などそれぞれであった。しかしどのような環境に身

を投じたとしても、松之山で過ごした数年の体験は、『君たちの個性・特性を含めた人格の土台となっていると思う』と当時の思いを語りながら修園生の問いに答えた。

そして『でもね、青ちゃん。今でも、あの時の滾るような体験を求めて生きてると感じる時があるんだ。これって結構大変』『あんなたくさんの体験をさせておいて、修園したら、あとは各自で頑張つて！ なんてちよつとズルくないですか？』

目の前にいる四十齡前後の修園生たちは、それぞれの人生を心から謳歌しながら生きているように感じた。

あおき・たかし

公益財団法人育てる会 理事、大岡ひじり学園学園長。大学卒業後二輪店に勤務、その後育てる会に入職。松之山学園に十年、大岡ひじり学園立ち上げより二十三年間勤務、計三十三年間山村留学の現場で教育実践を行う。趣味特技・サーフィン、スキー、釣り、民俗芸能（太鼓、踊り、三味線、笛）、農作業、オートバイ、サックス、山菜キノコ採りなど。